

# 中国の大学の 日本語専攻における問題

卒業論文の指導

王 健宜

## 一 「拡大する学習者」と教育の質

中国では日本語教育が盛んである。国際交流基金の調査によれば、二〇〇三年現在、約四七五校余りの大学で日本語教育が実施され、二十万人ぐらゐの若者が主専攻、副専攻、あるいは第一外語、第二外語として日本語を勉強している。一九九九年には十万人程度であった大学の日本語学習者数が、たった五年間で倍増したことになる。

さらに、初等中等教育と学校外教育を合わせると、何と



現在四十万人以上の人々が何らかの形で日本語を学んでいることになる。これは、現在日本語教育が行われている世界一〇余りの国や地域の中で、韓国に次ぎ第二位になる。また、二〇〇五年の日本語能力試験の中国の受験者数は十四万五千人以上に上り、国や地域別で計算すると世界で一番多い。

一方、学習者数の規模が拡大したのに対し、「中身」つまり教育水準あるいは教育効果という「質」の部分では、様々な問題が出ている。例えば、大学での学習者数が十万人から二十万に倍増したのに対し、肝心な教える立場に立

つ大学の日本語教員数は二五〇〇人から三四〇〇人へとわずかに三六%しか増加せず、決して倍増しているわけではない。また、学科設置の基本的条件の問題、人材育成のスタンダードの問題、教材の問題、教え方の問題、カリキュラムの問題、シラバスの問題、教案の問題、能力測定と教育効果の評価の問題等々が、日本語学習者の規模の拡大にもなう卒業生の大量放出によって浮き彫りされてきた。これらの諸問題を試行錯誤しながら徐々に解決していくのが、中国の大学における日本語教育の現状と課題ではないかと思われる。しかしながら、以上の問題は、相互に絡み合っており、複雑な様相を呈しており、決して簡単に片付けられる問題ではない。

## 二 教育のあり方をめぐる問題

また、いかなる言語の教育においても、それがどのような能力の育成を目指すのかを語るとき、その能力をどう捉えるかという定義付けと教育の方法論の確定が不可欠である。教材、教室活動、評価の諸問題はそれに付随したものとと言える。

言語の「運用能力」あるいは「コミュニケーション能力」に対する認識はその好例である。コミュニケーション能力の捉え方に発端し、それがアプローチ、シラバスへと

関連していく。チャムスキー [Chomsky 1965] が知識としての「言語能力」(competence)と言語を様々な場面や状況や文脈に応じて運用する所謂「言語運用能力」(performance)を区別して以来、言語運用能力あるいはコミュニケーション能力とその育成が重視され、コミュニケーション・アプローチが脚光を浴びた。そして、これに基づいたロール・プレイあるいはインフォメーション・ギャップのある活動、さらにサーベイなど教室を越えた学習活動が設計、実践されている。この場合、育成を目指す能力は、言語運用能力あるいはコミュニケーション能力と言える。しかし、川上「二〇〇六」で指摘されるように、コミュニケーション能力の研究が発展するとともに、それを確定する定義も揺れ、したがって、言語教育のあり方が確立できないという面もある。

コミュニケーション能力には、①文法能力、②社会言語能力、③談話能力、④ストラテジー能力の四つの領域の力(知識とスキル)があると考える。「Canale 1983」が基本であったが、その後、そのバリエーションとして「異文化間能力」や「社会的文化的能力」、インターアクション能力などを加味して捉えられるようになった。その場合、「接触場面」を重視したビジター・セッションやインタビューなどを配置したコース・デザインが重視された。ただし、この

ような基本的な捉え方については、言語使用域の概念や非言語的コミュニケーション、第一言語によるインタラクティブ・パターンへの影響など含まれていないとする批判〔Scarcella & Oxford 1992〕もあるように、*シミュレーション能力*の定義自体も必ずしも確立しているわけではなく、そのため、言語教育そのものあり方も確立しているとはいえない状況にある。〔川上二〇〇六〕

そこで、国際交流基金は二〇〇五年から「日本語教育のスタンダード」の構築に取り組んでいる。「日本語教育のスタンダード」とは、標準的なアクセントやイントネーションあるいは語彙や漢字の数が制限された日本語を意味するのではなく、「日本語を学ぶ人や教える人が、どのような過程（プロセス）を経てそれぞれの目標（ゴール）に達するのか、導くのかという「標準的」で「体系的」な方法論」のことを指す〔嘉数二〇〇六〕。この方法論の整備こそが、これから日本語教育の各方面に大きな影響を与えるのであろう。

### 三 大学の日本語専攻における 卒業論文の意義

前節では、マクロの視点から問題を見たが、大学の日本

語専攻における固有の問題を考えた場合、いわゆる「アカデミック・ジャパニーズ」（勉学に使われる日本語）に関する問題が挙げられよう。

なかでも火急の問題と考えられるのは、卒業論文に関する問題である。

この問題が多くの研究者の関心を集めることとなった契機は、「日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール」の開催にある。これは、二〇〇〇年から日本のNPO法人「日中友好市民倶楽部」と「中国日本語教学会」の共同主催で連続六年開催されており、中国の日本語教育界に一石を投じた活動である。これによって、卒論指導における様々な問題がクローズアップされたのである。本稿では、大学の日本語学科専攻の学部生の卒業論文について、その現状と問題点を中心に述べることにする。

そもそも卒業論文とは何か。

卒業論文は学生にとって大学で四年間勉強した学習成果の締めくくりであり、大学院生志望、研究者志望の学生にとっては特に重要なスタートである。〔宿二〇〇四〕

卒業論文は、大学勉学の総決算であり、また新しい学問への再出発点、社会に出る第一歩あるいは踏み台でもある。〔高二〇〇四〕

卒業論文は大学教育の有様を如実に反映するバロ

メータであり、学生にとっては大学生活の集大成的な創作とも言える。「王二〇〇四」

では、何のために卒業論文を書くのか。日本語の能力を高めるためでもなければ、知識を系統化させるためでもない。日本語による思考の回路を独自に構築するためではないかと筆者は思う。小野寺「二〇〇四」は以下のように述べている。

卒業論文作成は卒業要件の一つであるが、その意義について言及されることは少ない。(中略)「論語」には「子の曰はく、学んで思わざれば則ち罔し、思うて学ばざれば則ち殆し」という言葉があり、カントは「知識は経験とともに始まるが、思惟がなければ盲目だ」と言っている。これは、学問をする人間は受身で物事を捉えるのではなく、謙虚に学びつつも、自分の頭でよく咀嚼し、批判的に物事を観察する訓練が大切だということである。(中略)日本語を読み話せることが究極の目的ではなく、①論理的思考回路の構築と、②豊かな感性を育むことが追求すべき課題である。①については問題はないが、②こそが困難な課題なのである。かくて、②の達成如何が、学問の成否を左右することになる。独自の学問体系を確立しつつも、他者に対する思いやりや、社会との調和を如何にして図るかということが、大きな課題になるのだ。別

の言葉で言えば、「バランス感覚」の陶冶こそが、大きな鍵を握る。(中略)学生がこのような能力を高める機会には、卒業論文作成に尽きると思われる。「小野寺二〇〇四」

#### 四 日本語学科の卒業論文における問題点

詰まるところ、卒業論文は、今まで学んだすべての知識を総動員して、自分の頭で考える、自分なりの思考回路を構築し、自分の学問体系を組み立てる作業である。そこで、四年間の学習の総集点といえる卒業論文における問題点を分析し、今後の指導の課題について述べていきたい。では、この肝心な卒業論文には、どんな問題があるか。上述の「日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール」の応募された論文に、いくつかの共通する問題点が含まれているので、これを中国の大学全体の問題として扱うこととした。

まず、テーマの問題、次に先行研究の問題、最後にもっとも重要な指導体制の問題について述べていくこととする。

##### (一) テーマの問題

テーマの問題として、学部生の卒業論文には途轍も

ないほど大きいテーマがしばしば見られる。例えば、「日本古代文体形態研究」、「中日比較文学の研究」、「中日文化交流について」、「日本からの直接投資と技術移転」、「日本の経営の行方」、「中日企業文化の比較」等、どれもこれも大き過ぎ、学部生の卒業論文どころか、博士課程の論文にしても容易にカバーできないだろう。テーマの大き過ぎる論文は、学部生の学力では把握が難しく、論理的な系統作りが不可能であるから、往々にして焦点がぼやけて、論拠の支えが不十分かあるいはまったく根拠のない、唐突で訳の分からない結論になってしまうことが多い。もはや論文ではなく、エッセーか感想文になってしまう。この点について胡「二〇〇二」でも以下のように述べられている。

適切な題を選ぶことはとても大切だ。「日中教育におけるいじめ問題」は社会文化方面に属する問題である。教育はその下位分類の問題で、いじめ問題はまたその下位分類のものである。例えば、「日中教育について」であれば、大きすぎて不適当になるのである。「中国の民営企業の研究」とか、「日本人と中国人の違い」とか、「人間性について」などはそれである。

〔胡二〇〇二〕

テーマの問題でもう一つ気になるのが、専攻分野とまったく違う分野をテーマにしている論文である。コンクール応募論文を読むと、軍事、環境、犯罪、心理、経営、金

融、料理、外交、法律、政治、音楽、エネルギー等々、日本語日本文学専攻の学生がどうしてこれらのテーマで卒業論文を書けるのだろうかと思うようなテーマが見受けられる。これらはいずれも研究に値するテーマではあるが、誰もが簡単に研究できるものでもなければ、誰もが簡単に指導できるものでもない。いかなる分野でも、体系的な基礎知識と系統的な学問の訓練が必要で、これは論文を書く前提条件となっている。自分の専門以外の分野の論文を書くことは、他人の言うことを鵜呑みするか、ひどい場合は丸写しで終わってしまう、あるいはプロの目で見ると、まったくの門外漢の的外れの意見や感想文になってしまうがちなのである。

## (二) 先行研究の問題

### (1) 先行研究の引用

二つめの問題は先行研究である。論文というものは、参考文献がなければ成り立たない。言い換えれば、参考文献は論文成立の必須条件である。なぜかという点、われわれは常に先人の研究を踏まえながら、その成果にプラスアルファという形で研究活動を展開するしかないからである。しかし、学生の論文を読むと、この点がまだ理解不十分のようである。

論文の中で引用しながら、参考文献として挙げてい

ないとか、あるいは参考文献がない。それから、学生によつては、参考文献という本になつていようなものしかないと考えられているようだ。実は論文を書く時、まとまった本よりも、論文の形で発表されているものをもっと大事である。〔徐二〇〇四〕

ある論文は最初から最後まで、引用がないのです。

これは科学的な研究にならないと思います。引用が多くなると、自分の観点がなくなるのではないかと心配するかもしれないが、学識と研究能力がいまひとつの大学生の研究は大家の引用によつてサポートされなければ、とても信用をえられません。一番いけないのは、他人のものをそのまま写した、引用と明記しない「引用」です。〔修二〇〇三〕

## (2) 先行研究の重要性

学部生の論文を読んでもっとも気になるのは、「この道の大家」といった書き振りである。なかには、一流の研究者として一流の研究結果を發表しているような、卒業論文とは呼べないものもある。そうなつてしまう理由の一つは、引用と明記しない引用（きれいに言うところだが、事実上は踏襲、丸写し）が多いことにあるが、今一つは、先行研究の大切さが分からず、その取り扱いができないことにあるのではないかと思う。論文コンタールの審査におい

ても、良し悪しの判断の一つはこの先行研究の扱い方にかつてゐる。そこで、卒業論文を書くにあつて、先行研究をいかに扱うかについて述べたい。

「すこしのことにも、先達はあらまほしきことなり」〔徒然草〕の第五十二段の一文。仁和寺のある有名な法師が、念願の石清水八幡に一人参拝した。帰つてから話を聞くと、山の下にある末社に参拝しただけで、山の上にある肝心の本物の石清水にいつていないことが分かつたという話だが、兼好が「すこしのことにも、先達はあらまほしきことなり」（些細なことにも、先導者はほしきものである）と締めくくつた言葉は卒業論文を書く場合にも通ずるものである。卒業論文を書く場合、まずテーマを選ばなければならぬが、そのとき、これまでどんなものが研究されているか、どんな先行研究があるかを知らなければならぬ。先行研究はまずこのような「先達」の役割を果たすものである。先行研究に触れずに卒業論文を書くことは、仁和寺の法師の二の舞にならざるをえない。

先行研究について多く述べると、独創性がないと思われるがちかもしれないが、そうではない。むしろ、大学の学部生の研究としては、それが多く語られるほど、その「独創性」が評価される。卒業論文が科学的研究である以上、独創性が強調されるのは当然であろう。先行研究の把握なしには、独創性が生まれてこないといつてよい。大学生の研

究は、研究に費やす時間や研究の視点、基礎となる知識などにおいて、研究者の研究はもちろん、修士論文にも及ばない。したがって、多くの先行研究によって自分の考えをサポートしないと信憑性の高いものにはならないわけである。「このことについて私はこう思う」と書くより、「このことについては、大家の何某がこう述べている」というほうが、よほど説得力がある。ゆえに、先行研究の重要性を理解させ、それについて大いに語らせるような指導が望ましい。

### (3) 先行研究の把握

まず、テーマを決める際には、自分の関心分野に関してどのような先行研究があるかを手元にある資料やインターネットなどで調べさせておくことだ。論文が書けるかどうかはどれだけ先行研究の資料を持つかに大いにかかわっている。先行研究が全くない分野のテーマでは、うまく書くことは不可能に近い。より多くの先行研究のある分野について書くほうがよい。

テーマが決まったら、先行研究ではどう考えられているかを調べさせる。A説とB説とでは、考えはどう違うか、どの説が先に出され、どの説が後に出されたのか、どの説がどの説を受け継いだのかなどについて知らなければならぬ。先行研究を生かす大前提は、できる限り先行研究の

範囲、内容、数量を把握することだ。始めは、先行研究のどれもが、なるほど一理あり、自分には書けるものがないと思うかもしれないが、それはまだ、研究の心構えがなく、問題意識を持っていない段階だという表れである。先行研究でヒントを得、その問題点を見つけるまで、読むことである。先行研究を呑み込む前に論文を作成させることは禁物である。

### (4) 先行研究と自分の研究

先行研究により論文テーマを決め、先行研究の正しい把握により問題意識を持ち始め、ヒントまたは問題点を見つけ、自分の論を出すべきだと述べてきたが、次は、構成のうえでは、先行研究をどう扱うかについて述べてみたい。

よい論文は、先行研究の紹介と自分の論という二つの部分からなるべきだが、両者の割合はどうあるべきか。私見であるが、語学の論文の場合は、先行研究の紹介や評価は、最低でも六〇%ぐらいは必要だと思う。そして、自分の論は三〇%〜四〇%ぐらいでよい。つまり、優秀な論文は構成上、六〇%の文面でこれまでの先行研究を紹介、評価し、その不備または問題点を指摘し、三〇%〜四〇%で自分の論を進めればよいのである。先行研究の紹介については、論文執筆者がまとめてもよいし、他人の見解の引用でもよい。独創性が少ないのではないかというかも知れ

ないが、先行研究の客観的把握こそ、独創性のある論を打ち出す鍵である。自分の論は、先行研究の不備を指摘するものでもよいし、先行研究を発展させるものでもよい。また他人の先行研究に関する論の不備を指摘してもよい。

先行研究の膨大化で、どうしても手の届かないところにも先行研究が存在するが、卒業論文の場合、あくまで、手の届く範囲内で、先行研究を考察すればよいと思う。

大学の卒業論文のための研究は、研究者の研究、大学院生の研究と違い、むしろ問題意識の持ち方、研究方法を学ぶ段階のものだと言つてよいから、先行研究によつてそれを見つければ十分ではないかと思う。もちろん、ずばぬけて優秀なものはないわけではないが、一般の論文指導はこの方向で行うと、より高い水準の論文が生まれ、そして、より強い研究能力をもつ学生も養成できるのではないかと思う。「修二〇〇三」。

### (三) 指導体制の問題

最後にもっとも重要な指導体制と指導要領および指導教官の問題である。大学により指導体制とその要領、または指導教官の責任範囲なども多少違うと思うが、コンクールの応募論文から、以下のような問題点が見られる。

明らかに指導教官の指導形跡が見られるものもあれ

ば、どうも、指導教官不在の論文も多数ある。指導教官不在の論文が作成される原因としては、学生の選んだテーマが自分の専門ではない、指導する学生数が多すぎる、指導しようと思つても学生が言われるとおりにはやらない、学生に論文を書く力がないから指導を放棄するなどが考えられるが、こうだからこそ、指導が必要なのではないだろうか。表現上の指導ではなく、むしろ、最初の「ネタ」探しからしっかり指導をしておかないと指導しにくくなる。「修二〇〇三」

## 五 結 論

以上に述べたように、卒業論文からは、執筆者である学生の能力ばかりでなく、その所属する大学の教育レベル、管理体制ないし指導教官一人ひとりの学識、態度、実力などが伺われる。応募論文の間に存在する大学間の差は予想以上に大きいものであった。例えば、四〇ページに及ぶ長い論文もあれば、わずか六ページの小論文ともいえない短い論文もある。完璧な日本語で書かれた論文もあれば、ミスタドクの論文もある。独創性あふれるすばらしいものもあれば、陳腐な饒舌の丸写しもある。

今後の課題は、何よりも指導体制の確立が第一歩だと思ふ。大学によつては、指導教官に対する「指導」も必要で

はないかと思われる。指導教官がしっかりとした指導力を持って、少なくともテーマの問題、引用の問題、先行研究の問題、研究分野の問題、構成の問題、書き方の問題などにかかわる指導がきちんと行われるだろう。

また、何をどのように指導するか、いわゆる指導要領の明確化も大事な課題であろう。明確な指導要領がなければ、指導そのものが自己流になり、いい加減なものになってしまう恐れがある。その意味では、論文作成と指導のスタンダードを早急に立案する必要がある。これは大学によって特色のあるものでよいが、要は、学問上の常識と一般慣習に合うようなものでなければならぬ。

良い論文とは、先達の研究を十分に噛み砕いた上で、自分の説を論理よく確立したものであろう。そのため、先行研究と自説は不可欠の二大要素になる。ところが、この二大要素は密接な関係にあるものでなければ、意味がない。つまり、先行研究と自説の間の関連性を見出すこと、あるいは先行研究を批判しながら自説の正しさを証明していくことが、所謂論文作成という作業ではないかと思う。これは正に「言うは易く行は難し」であろう。

### 参考文献

Chomsky, N. 1965 *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge: The

MIT Press.

川上郁雄 二〇〇六 「日本語教育学とは——言葉・子供・発展の視点から」『日本語教育学とは何か——早稲田からのメッセージ——博士課程完成記念プロシードィングス』

早稲田大学大学院日本語教育研究科、六八、六九頁。

嘉数勝美 二〇〇六 「日本語教育スタンダード」とは？」

『日本語教育通信』五五号、国際交流基金。

宿久高 二〇〇四 『第四回日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール記念文集』南開大学日本語学部、九五

頁。

高文漢 二〇〇四 『第四回日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール記念文集』南開大学日本語学部、九四

頁。

王健宜 二〇〇四 『第四回日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール記念文集』南開大学日本語学部、九二

頁。

小野寺健 二〇〇四 『第四回日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール記念文集』南開大学日本語学部、一

頁。

胡振平 二〇〇三 『第三回日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール記念文集』南開大学日本語学部、八〇

頁。

徐一平 二〇〇四 『第四回日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール記念文集』南開大学日本語学部、九九

頁。

修剛 二〇〇三 『第三回日中友好中国大学生日本語科卒業  
論文コンクール記念文集』 南開大学日本語学部、八五、八  
七―八九頁。

早稲田大学大学院日本語教育研究科編 二〇〇六 『早稲田  
日本語教育の歴史と展望』 アルク。